

ジェンダーと性の教育部会

中川 美保子

すべての教科書にジェンダーの視点を

今年度も月一回の部会を開くように計画をして来ました。部会では、ジェンダーをめぐる情勢についての学習を大事にしながら、学校の状況や子ども様子を中心に実践交流をしています。

4月 年間計画の話し合い

5月 「東京の教育の今」を大山都教組副委員長が報告

6月 「新課程の中、中学体育はどう変わったか」

7月 「大きくなったよー二年生生活科」

8月 「教育のつどい」に参加

9月 「わたしが出会ったデンマークの子どもと教育」

10月 「いじめ自殺事件を考える」

11月 東京教研「男女平等の教育」分科会に参加

1月 「東京教育集会」参加

2月 「四年生の性教育その後」

毎回話題になるのは、学校の変化です。子どもの問題や気になることなど、以前だったら当然のように学年会などで話し合っていたことがあまりにも忙しいので、教師一人ひとりが背負わなくてはならず、事務量も増え、心も体も疲労困憊^{はげ}、研修もとても自主的なものまで手が回らない状況です。

ジェンダーの教育を考えると、取り組みにくい、なじみがないと思ってしまう人が多いかもしれませんが、今社会的には、さまざまな事件の背景に、ジェンダー問題があるのです。

たとえば「いじめ事件」の背景には、両親や保護者の男女差別意識、両親の間のDVなどがいじめる側の子どもたちに見られがちです。またいじめの中にも性的なものも多く見られ、「ズボンやパン

ツを脱がす」「排せつの様子を見る」等、個人の尊厳を傷つける行為でいじめられている子どもには、被害を訴えるのをためらう要因にもなっているようです。

子どもだけでなく、近頃TVでも扱うようになってきましたが、DVによる殺人なども人権意識を育てられていない大人や、取り締まる警察官にも「DVを受ける女にも問題がある。男の言うことを聞かないからだ」などという男女差別観があるように思われます。

教科書の中にも、ジェンダー問題がいろいろあります。中学社会の歴史・公民教科書の「慰安婦」記述問題だけでなく、扱う人物や、女性の置かれてきた社会的地位・労働・賃金差別などまだまだ男中心の記述になっています。

国語教科書にも女性の主人公が少なく作家も男性が多い、扱われている人物にも生き生きとした女性像がほとんど見られないなど、多々あります。

授業の中で、そんな教材をどの様に生徒に提起すれば、ジェンダー平等意識を持った社会人を育てる事になるのか、実践の積み重ねが今切に求められています。ぜひ実践をお知らせください。

(共同研究者)